『太平広記』訳注

――巻四百二十二「龍」五（下）――

太平広記読書会

本稿は前稿「『太平広記』訳注　―巻四百二十一「龍」五（上）―」（『国語国文学研究』第五十一号　二〇一九年）に続き、『太平広記』の巻四百二十二後半八話の訳注である。『太平広記』は北宋の初めに編纂された小説を集めた類書である。本書は日本の説話文学に影響を与えたことでも知られており、その訳注を行うことは今後の中国文学・日本文学双方の研究に資するところが大きいと考える。

またこれは平成十七年七月十四日より始まった『太平広記』読書会の成果の一部でもある。当読書会は熊本大学所属の教員を中心にして、他大学の教員や学生、社会人など、所属の枠にとらわれず広く集まった有志による会であり、今後も『太平広記』を読み進めていく予定である。

以上はこれまでも記してきたことであるが、令和元年末からの新型コロナウィルスの世界的大流行を受けて、大変遺憾なことに当研究会も令和二年一月三十日開催の第二百十三回をもって休会を余儀なくされている。現在は屋敷が個人で作業を継続しているが、一日も早く教育・研究活動が旧に復することを切に願っている。

底本、参考文献、及び字体については「『太平広記』訳注　―巻四百十八「龍」一（上）―」（『国語国文学研究』第四十三号　二〇〇八年）及び「『太平広記』訳注　―巻四百二十「龍」三（下）―」（『国語国文学研究』第四十八号　二〇一三年）に記した通りである。作品番号は前稿の続きとする。

○36「資州龍」

〔本文〕

韋皋鎮蜀末年、資州獻一龍。身長丈餘、鱗甲悉具。皋以木匣貯之、蟠屈於内。時屬元日、置於大慈寺殿上。百姓皆傳、縱觀二三日、爲香煙熏死。

國史闕書。是何祥也。（出『紀聞』）

〔訓読〕

韋皋　蜀に鎮するの末年、資州　一竜を献ず。身の長　丈余、

鱗甲 悉く具ふ。皋 木匣を以て之を貯ふるに、内に蟠屈す。時元日に属し、大慈寺の殿上に置く。百姓 皆伝へ、縦に観ること二三日、香煙の薫ずるところと為りて死す。

国史 書を闕く。是 何れの祥なるや。

〔語注〕

○**韋皋** 七四五～八〇五。字は城武、京兆万年（現在の陝西省西安市）の人。建中四年（七八三）に朱泚の乱が起こるとそれに誘われたが従わず、奉義軍節度使を授けられた。貞元元年（七八五）に剣南西川節度使となり、その後検校司徒兼中書令に昇進、南康郡王に封ぜられた。『旧唐書』巻百四十、『新唐書』巻百五十八に伝がある。郁賢皓『唐刺史考全編』（安徽大学出版社 二〇〇〇年）に拠れば、韋皋が益州刺史であったのは貞元元年（七八五）から永貞元年（八〇五）のことであるので、この話は永貞元年の話ということになる。韋皋はこの年に病死しているので、この話はその予兆となっているか。○**資州** 四川省内江市北東部と資陽市一帯。○**大慈寺** 未詳。同名の寺はいくつかあるようで、例えば隋文帝「隋国立仏舎利塔詔」（『広弘明集』巻十七）に「相州大慈寺」という記載がある。この話と同じ蜀の寺としては、『北夢瑣言』佚文（『広記』巻二百八十九所引）に「高燕公鎮蜀日、大慈寺僧申報、堂佛光見。」（高燕公 蜀に鎮する日、大慈寺の僧 申報す、堂仏に光見る、と。）とある。また『宋高僧伝』巻六「唐彭州丹景山知玄伝」に「時丞相杜公元穎作鎮西蜀、聞玄名命升堂、講談于大慈寺普賢閣下。」（時に丞相杜公元穎 鎮西蜀と作り、玄の名を聞きて堂に升らんことを命じ、大慈寺普賢閣下に講談せしむ。）とある。

○『**紀聞**』 盛唐から中唐の牛粛が編纂した小説集。多く開元天宝年間のことを記している。崔造（七三七～七八七）の注が付されていたが、現存しない。既に散佚しており、現在見ることができるのは、輯本十巻のみである。『太平広記』には百二十六話が収められている。この話は通行本には収められていない。なお李剣国『紀聞輯校』（中華書局 二〇〇五年）は、この話は本来『戎幕閑談』であるのを『広記』が『紀聞』に誤っているとする。

〔訳文〕

韋皋の蜀の太守在任の末年、資州が一頭の竜を献上した。身長は一丈（三・一一m）余り、全身に鱗が生えていた。皋が木箱に入れておいたところ、箱の内でとぐろを巻いていた。ちょうど元日であったので、大慈寺の本殿に置いておいた。人々が伝え聞いて二、三日自由に見ていたところ、（竜は）御香の煙に燻されて死んでしまった。

（このことは）正史には記載されていない。これは一体何の予兆であろうか。

○37「韋思恭」

〔本文〕

元和六年、京兆韋思恭與董生、王生三人結友、於嵩山岳寺肄

業。寺東北百餘歩、有取水盆在岩下。圍丈餘、而深可容十斛。旋取旋增、終無耗。一寺所汲也。

三人者自春居此。至七月中、三人乗暇欲取水、路臻於石盆。見一大蛇長數丈。黒若純漆、而有白花、似錦。蜿蜒盆中。三子見而駭。視之良久、王與董議曰、「彼可取而食之。」韋曰、「不可。昔葛坡之竹、漁父之梭、雷氏之劍、尚皆爲龍。安知此名山大鎭、豈非龍潛其身耶。況此蛇鱗甲、尤異於常者。是可戒也。」二子不納所言、乃投石而扣蛇且死。縈而歸烹之。二子皆咄韋生之詐潔。

俄而報盆所又有蛇者。二子之盆所、又欲擊。韋生諫而不允。二子方擧石欲投、蛇騰空而去。及三子歸院、烹蛇未熟。忽聞山中有聲、殷然地動。覘之、則此山間風雲暴起、飛沙走石、不瞬息至寺。天地晦暝、對面相失。寺中人聞風雲暴起中云、「莫錯擊。」須臾、雨火中半下、書生之宇、竝焚蕩且盡。王與董、皆不知所在。韋子於寺廊下無事。

故神化之理、亦甚昭然。不能全爲善、但吐少善言、則蛟龍之禍不及矣。而況於常行善道哉。其二子尸、迨兩日、於寺門南隅下方索得。斯乃韋自説。至於好殺者、足以爲戒矣。（出『博異志』）

〔訓読〕

元和六年、京兆の韋思恭と董生、王生と三人 友を結び、嵩山岳寺に於いて肄業す。寺の東北百余歩に、取水の盆の岩下に在る有り。囲 丈余、而して深さ十斛を容るべし。旋ち取れば旋ち増し、終に耗る無し。一寺の汲む所なり。

三人は春より此に居る。七月中に至り、三人 暇に乗じて水を取らんと欲し、路 石盆に臻る。一大蛇の長 数丈なるを見る。黒きこと純漆の若く、而して白花有り、錦に似たり。盆中に蜿蜒たり。三子 見て駭く。之を視ること良や久しくして、王と董と議りて曰く、「彼 取りて之を食らふべし」と。韋曰く、「可ならず。昔葛坡の竹、漁父の梭、雷氏の劍、尚ほ皆竜為り。安くんぞ此の名山大鎭、豈に竜 其の身を潜むるに非ざるを知らんや。況んや此の蛇の鱗甲、尤も常なる者に異なり。是 戒むべきなり」と。二子 言ふ所を納れず、乃ち石を投じて蛇を扣ちて且つ死す。縈りて帰り之を烹る。二子 皆韋生の詐潔を咄る。

俄かにして盆の所に又た蛇有りと報ずる者あり。二子 盆の所に之き、又た撃たんと欲す。韋生 諫むるも允さず。二子 方に石を挙げて投ぜんと欲するに、蛇 空に騰がりて去る。三子の院に帰るに及び、烹し蛇 未だ熟せず。忽ち山中に声有るを聞き、殷然として 地 動く。之を覘へば、則ち此の山間 風雲暴かに起こり、飛沙走石、瞬息ならずして寺に至る。天地 晦暝し、面を対するも相失ふ。寺中の人 聞くに 風雲 暴かに起こりし中に云ふ、「錯り撃つ莫かれ」と。須臾にして、雨火中半に下り、書生の宇、並びに焚蕩して且に尽きんとす。王と董と、皆在る所を知らず。韋子 寺の廊下に於いて事無し。

故より神化の理、亦た甚だ昭然たり。全く善を為す能はざる

も、但だ少善の言を吐かば、則ち蛟竜の禍ひ及ばず。而して況んや常に善道を行ふに於いてをや。其の二子の尸は、両日に迨び、寺門の南隅下に於いて方めて索め得たり。斯れ乃ち韋 自ら説く。殺すを好む者に至りては、以て戒めと為すに足る。

〔語注〕

○**京兆** 京兆尹の略。長安を行政区画の上で三分割した内、現在の西安市以東の地を指し、この地の行政長官も同名で呼ばれる。他に長陵以北の左馮翊、渭城以西の右扶風と併せて三輔と称される。○**韋思恭** 未詳。○**嵩山岳寺** 嵩山は河南省登封県の北にある名山。五岳の中岳。○**肄業** 手習いする。○**葛坡之竹** 『神仙伝』壷公の話を踏まえる。術士費長房は師の壷公から授かった竹の杖にまたがって仙界から人間界に戻った。その後杖を葛坡に投げ捨てたところ、青龍になったという。『神仙伝』巻五「壷公」（増訂漢魏叢書本）に「公以一竹杖與之曰、『但騎此、得到家耳。』房騎竹杖辭去、忽如睡覺、已到家。家人謂是鬼。具述前事、乃發棺視之、唯一竹杖。方信之。房所騎竹杖、棄葛坡中。視之乃青龍耳。」（公 一竹杖を以て之に与へて曰く、『但だ此に騎らば、家に到るを得るのみ』と。房 竹杖に騎りて辞去するに、忽ち睡覚するが如く、已に家に到る。家人 是鬼なりと謂ふ。具さに前事を述べ、乃ち棺を発きて之を視れば、唯だ一竹杖のみ。方めて之を信ず。房の騎る所の竹杖は、葛坡中に棄つ。之を視れば乃ち青竜なるのみ。）とある。○**漁父之梭** 晋の陶侃の話を踏まえる。陶侃が若い頃、雷沢で漁をしていて機織機の梭を拾い、壁に掛けておいたところ、雷雨が起こって梭が竜になって去って行った。『晋書』「陶侃伝」に「侃少時漁於雷澤、網得一織梭、以挂于壁。有頃雷雨、自化爲龍而去。」（侃 少き時 雷沢に漁し、網して一織梭を得、以て壁に挂く。有頃にして雷雨あり、自ら化して竜と為りて去る。）とある。○**雷氏之劍** 晋の張華の話を踏まえる。張華は天文に通暁した士雷煥の協力で「竜泉」と「太阿」という銘の二振りの宝剣を手に入れ、一振りずつ分けた。張華はこれを干将と莫耶であると鑑定し、このような霊物は今は別れ別れになっていても、何時かは共に在ることになろうと言った。張華と雷煥が亡くなった後、張華が持っていた方は所在不明になり、雷煥が持っていた方は息子雷華に受け継がれた。その後雷華は剣を川に落としてしまい、人に潜って取りに行かせたところ、そこには剣はなく、二頭の竜がわだかまっていたという。『晋書』「張華伝」に「煥卒、子華爲州從事、持劍行經延平津、劍忽於腰間躍出墮水。使人沒水取之、不見劍。但見兩龍各長數丈、蟠縈有文章、沒者懼而反。須臾光彩照水、波浪驚沸。於是失劍。」（煥卒し、子の華 州の従事と為り、剣を持ちて行きて延平津を経るに、剣 忽ち腰間より躍り出でて水に堕つ。人をして水に没して之を取らしむるも、剣を見ず。但だ両竜の各おの長 丈なるありて、蟠縈して文章有るを見、没せし者 懼れて反る。須臾にして光彩 水を照らし、波浪 驚沸す。是に於いて剣を失ふ。）とある。○**大鎮** 重鎮、大藩鎮。○『**博異志**』 晩唐・

鄭還古が編纂した小説集。鄭還古は谷神子と号した。現行本は一巻で十話しか収められていないが、『太平広記』には三十数話が収められている。この話は中華書局点校本の補編に見える。

〔訳文〕

元和六年（八一一）、京兆の韋思恭と董生、王生の三人は友人となり、嵩山岳寺で学んでいた。寺の東北百余歩（一歩＝一・五五五ｍ）の岩のところに水を汲める盆状のところがあった。一周一丈（三・一一ｍ）余り、深さは十斛（五九〇ℓ）が入るくらいであった。水を汲んだと思えばまた増え、とうとう減ることは無かった。嵩山岳寺だけがここの水を汲んでいた。

三人は春からここに滞在していた。七月になり、三人は暇潰しに水を汲んでみようと思い、石の盆のところに行った。すると長さ数丈もの大蛇が一匹いた。漆のように真っ黒な体に白い模様がついており、まるで錦のようであった。（大蛇は）石の盆の中でうねっていた。三子は見て驚き、しばらく見ていたが、王と董は「こいつを捕まえて食べよう。」と話し合った。韋は「それはいけない。昔、葛坡の竹や漁父の梭、雷氏の剣、これらすら皆竜だったではないか。どうしてこの名山であり重要な場所に竜が身を潜めているどうか分かろうか。ましてやこの蛇の鱗は通常のものとは全く違う。これは気をつけるべきである。」と言った。しかし二人は韋の言葉を聞き入れず、何と石を投げて蛇を打ち殺してしまった。そしてぐるっと回って（大蛇を）持ち帰り、煮てしまった。二人は韋生の偽善を批判した。

突然、石の盆のところにまた大蛇が現れたと報告する者がいた。二人は石の盆のところに行き、再び打ち殺そうとした。韋生が止めたが聞き入れなかった。二人がちょうど石を振り上げて投げようとした時、大蛇は空に飛び上がって去って行った。三人が寺に帰ると、料理していた蛇はまだ煮えていなかった。突然山中に地面を揺るがす轟音が鳴り響いた。見れば山のあたりに風や雲が急激に沸き起こり、砂嵐や石つぶてがあっという間に寺まで飛んできた。天地は真っ暗になり、お互い向かい合っていても相手のことが分からないくらいであった。寺の人は風や雲が急激に沸き起こっている中から「間違って攻撃してはいけない。」と言う声を聞いた。しばらくすると、雨と火が半分ずつ降ってきて、書生の居室は全て焼き尽くされそうになった。王と董との所在は分からなくなったが、韋生は寺の渡り廊下にいたので無事だった。

もともと神明なる変化の理は、とても明白なものである。完全には善行を行うことができずとも、わずかな善言を発しさえすれば、蛟竜の禍いは及ばないのである。ましてやいつも善行を行っていればなおさらである。董と王の二人の遺体は、二日経って寺の門の南の隅のあたりでやっと見つかった。これは韋が自ら説いた話である。殺戮を好む者にはこの話が教訓となり得る。

○38「盧元裕」

〔本文〕

故唐太守盧元裕未仕時、嘗以中元設幡幢像、置盂蘭于其間。俄聞盆中有唧唧之音。元裕視、見一小龍纔寸許。逸状奇姿、婉然可愛。於是以水沃之、其龍伸足振鬣已長數尺矣。元裕大恐、有白雲自盆中而起、其龍亦逐雲而去。

元裕即翰之父也。（出『宣室志』）

〔訓読〕

故の唐の太守盧元裕 未だ仕へざる時、嘗て中元を以て幡幢像を設け、盂蘭を其の間に置く。俄かに盆中に唧唧の音有るを聞く。元裕 視るに、一小竜の纔かに寸許なるを見る。逸状奇姿、婉然として愛すべし。是に於いて水を以て之に沃げば、其の竜 足を伸ばし鬣を振るひて已に長 数尺なり。元裕 大いに恐るるに、白雲の盆中よりして起こる有り、其の竜も亦た雲を逐ひて去る。

元裕は即ち翰の父なり。

〔語注〕

○**盧元裕** 盧正己のこと。字は子寛。常袞「太子賓客盧君墓誌銘」（『全唐文』巻四百二十）に「公字子寛、本諱元裕。以聲協上之尊稱、時方大用、優詔改錫焉。」（公 字は子寛、本の諱は元裕。声の上の尊称に協ふを以て、時に方に大いに用ふるも、優詔ありて改錫す。）とあり、諱を「元裕」から「正己」に改めたという。またこの墓誌銘によれば、盧正己は蜀郡長史、成都尹、剣南節度采訪等使、大理卿、刑部侍郎、工部尚書、東都留守、太子賓客などの職を歴任し、大暦五年（七七〇）に七十九歳で亡くなっている。但しいつ出仕したかは記されていないので、この話の時期は分からない。盧正己は両『唐書』に立伝されていないが、いくらか記載がある。「盧元裕」の名では両『唐書』にそれぞれ一条ずつ記載が見られ、『旧唐書』巻四十一「地理志」「剣南道・嘉州」に「乾元元年、復爲嘉州。三月、剣南節度使盧元裕、請升為中都督府。尋罷。」（乾元元年、復た嘉州と為す。三月、剣南節度使盧元裕、升を請ひて中都督府と為す。尋いで罷む。）とあって乾元元年（七五八）の剣南節度使に盧元裕という人物がいたとし、『新唐書』巻六「肅宗本紀」では至徳二載（七五七）の記事として、「六月癸未、尹子奇寇睢陽。丁酉、南充郡民何滔執其太守楊齊曾以反。剣南節度使盧元裕敗之。」（六月癸未、尹子奇 睢陽に寇す。丁酉、南充の郡民 何滔 其の太守楊斉曾を執りて以て反す。剣南節度使盧元裕之を敗る。）と言い、やはり剣南節度使盧元裕のことを記す。一方「盧正己」の名では、『旧唐書』巻十八下「宣宗本紀」に安史の乱末頃の記事として「賊平、東京留守盧正己又募得之。」（賊 平らげられ、東京留守盧正己 又た募りて之を得。）とあり、また『唐会要』巻四十「定贓估」に「刑部尚書盧正己」が上元二年（七六一）に文を奏上したという記録がある。これらが当時使っていた名をそのまま記しているとすれば、上元年間に入った頃に名を改めたことになるか。なお『新唐書』巻七十

三上「宰相世系表」上では盧履氷の子の欄に長子として「元裕。」、次子として「正己。刑部侍郎。」とあり、盧元裕と盧正己を別人としている。○**中元**　中元節のこと。旧暦七月十五日のことで、もとは道家の節日であったが、唐代には仏教の盂蘭盆会と習合が進んでいた。○**幡幢像**　仏堂に飾る仏具の旗や像。○**盂蘭**　盂蘭盆会のこと。旧暦七月十五日、祖先の冥土に於ける苦しみを救うため、仏に供え物をし僧に布施をする行事。目連尊者が餓鬼道に落ちた母を救うために、釈尊の教えによって僧達に捧げ物をしたという『盂蘭盆経』の記載に基づく。○**唧唧**　小さい声。○**翰**　盧翰のこと。生卒年不詳。徳宗朝の宰相。両『唐書』には立伝されていないが記述が散見し、『新唐書』巻六十二「宰相世系表」中の興元元年（七八四）の条には「丙戌、吏部侍郎盧翰爲兵部侍郎、同中書門下平章事。」（丙戌、吏部侍郎盧翰 兵部侍郎、同中書門下平章事と為る。）とあり、興元元年に盧翰が宰相となったことが記されている。先に「盧元裕」注で挙げた『新唐書』「宰相世系表」は「正己」の子として「翰、相德宗。」（翰、徳宗に相たり。）と記されている。○『**宣室志**』　晩唐・張読（八三四～八六六）が編纂した小説集。既に散佚しており、現在見ることができるのは、明代の輯本（十巻・補遺一巻）のみである。この話は通行本には収められていない。

〔**訳文**〕

元の唐の太守盧元裕がまだ出仕する前、かつて中元節に仏具の旗や像を奉納し、盂蘭盆会の供え物をその近くに置いておいた。突然供え物の盆の中から小さい音が聞こえてきた。元裕が見ると、一寸（約三．一一cm）くらいの小さな竜が一匹いた。類い稀な姿で、心引かれるような美しさであった。そこで水をかけてやると、その竜は足を伸ばしてたてがみを振るわせて、長さ数尺（一尺＝三一．一cm）になった。元裕が非常に恐れていると、白雲が盆の中から沸いてきて、その竜も雲の後を追って去って行った。

元裕は盧翰の父である。

○39「盧翰」

〔**本文**〕

唐安太守盧元裕之子翰言、太守少時、嘗結友讀書終南山。日晩溪行、崖中得一圓石。瑩白如鑑。方執翫忽次、墮地而折。中有白魚約長寸餘、隨石宛轉落澗中。漸盈尺、俄長丈餘。鼓鬐掉尾、雲雷暴興、風雨大至。（出『紀聞』）

〔**訓読**〕

唐安太守盧元裕の子 翰 言ふ、太守 少き時、嘗て友と結びて書を終南山に読む。日 晩れて渓行するに、崖中に一円石を得たり。瑩白なること鑑の如し。方に執りて翫ぶに忽次として、地に堕ちて折る。中に白魚の約ね長 寸余なる有り、石に随ひて宛転として澗中に落つ。漸く尺に盈ち、俄かにして長丈余。鬐を鼓し尾を掉へば、雲雷 暴かに興り、風雨 大いに

至る。

〔語注〕

○**唐安**　現在の四川省崇州市。○**盧元裕**　盧正己のこと。38「盧元裕」の語注「盧元裕」を参照。郁賢皓『唐刺史考全編』に拠れば、盧元裕が唐安太守であったのは天宝年間（七四二～七五六）末頃であろうという。○**盧翰**　38「盧元裕」の語注「翰」を参照。○**終南山**　現在の陝西省西安市の南南西に在る名山。唐の都長安に近いことから、文人達が遊ぶ場所であると共に、隠者の住まう所として知られた。○『**紀聞**』　盛唐から中唐の牛粛が編纂した小説集。多く開元天宝年間のことを記している。崔造（七三七～七八七）の注が付されていたが、現存しない。既に散佚しており、現在見ることができるのは、輯本十巻のみである。『太平広記』には百二十六話が収められている。この話は李剣国『紀聞輯校』（中華書局　二〇〇五年）の巻九に見える。

〔訳文〕

唐安太守盧元裕の子の翰が言うには、太守は若い頃、友人と一緒に終南山で書物を学んでいた。日が暮れて谷川を歩いていると、崖のところで鏡のように白く輝く丸い石を拾った。丁度手にとって眺めていたところ、突然地面に落ちて割れてしまった。中には一寸（約三・一一cm）ほどの白い魚が入っており、石と一緒に谷川に転げ落ちていった。だんだん一尺（約三一・一cm）余りまで大きくなって、あっという間に一丈（約三・一一m）余りになった。たてがみを振るわせ尾を跳ね上げると、雷雲が突然沸き起こり、風雨が大いに巻き起こった。

○40「李修」

〔本文〕

唐浙西観察使李修、元和七年、爲絳郡守。是歳、其屬縣龍門有龍見、時觀者千數。郡以状聞于太府。

時相國河東府張弘靖爲河中節度使。相國之子故舒州刺史以宗、嘗爲文以讃其事。（出『宣室志』）

〔訓読〕

唐の浙西観察使李修、元和七年、絳郡の守と為る。是の歳、其の属県　龍門に龍の見はるる有り、時に観る者　千もて数ふ。郡　状を以て太府に聞す。

時に相国河東府の張弘靖　河中節度使為り。相国の子　故の舒州刺史以宗、嘗て文を為して以て其の事を讃ふ。

〔語注〕

○**浙西観察使**　地方藩鎮の一つ。観察使は元々諸州を巡って政治の良否を見る令外の官。節度使が軍事関係の使職の総称であるのに対して、観察使は民政関係の使職。多くの場合、節度使が観察使を兼ねる。浙西観察使の治は、現在の江蘇省鎮江市。○**李修**　未詳。両『唐書』に記載無し。或いは李脩のことか。李脩は？～八一九。字は脩。貧賤の出であったが、荘憲太后の妹の夫となったことから身を起こし、坊州、絳州刺史となった。

特段の才能は無かったが細かい所に気が利く性格で、賓客の接待や宦官とのつきあいを良くした。その後司農卿、京兆尹等を歴任、皇帝の寵愛をかさに着て近臣を讒言した。その後荘憲太后が亡くなると陵墓の造営と葬儀を掌ることになったが、費用を惜しんだが為に大失敗した。李逢吉は彼を免官するように奏上したが、憲宗は罪を問わずに浙西観察使とした。その後病を得て都に戻り、元和十四年に亡くなった。『旧唐書』巻百六十二、『新唐書』巻二百六「外戚伝」に伝がある。○**絳郡守**　絳郡は絳州のこと。唐代の絳州は、現在の山西省新絳県一帯。郁賢皓『唐刺史考全編』に拠れば、李脩が絳州刺史であったのは元和七年（八一二）のこと。○**龍門**　現在の山西省河津市の北に在る名山。唐代は絳州の域内に在った。○**太府**　「大府」に同じ。上級の官庁の称。ここでは河東府のことをいうか。○**相國**　宰相を言う。張弘靖は後に中書門下平章事に至っている。○**河東府**　太原府に同じか。太原府は河東節度使の幕府で、治は現在の山西省太原市。○**張弘靖**　七六〇～八二四。字は元理。張嘉貞の孫、張延賞の子。憲宗朝の宰相。家柄によって河南参軍、監察御史、戸部侍郎、河中節度使を歴任し、元和中に刑部尚書同中書門下平章事を拝する。後、出でて太原節度使となり、太子少師に終わる。『旧唐書』巻百二十九、『新唐書』巻百二十七に伝がある。郁賢皓『唐刺史考全編』に拠れば、張弘靖が河東節度使であったのは元和十一年（八一六）から元和十四年（八一九）のこと。○**河中節度使**　地方藩鎮の一つ。治は山西省永済市の北。郁賢皓『唐刺史考全編』に拠れば、張弘靖が河中節度使であったのは元和六年（八一一）から元和九年（八一四）のこと。○**舒州刺史**　舒州は現在の安徽省潜山県辺り。○**以宗張次宗**のことか。郁賢皓『唐刺史考全編』は会昌中（八四一～八四六）の舒州刺史として張次宗を挙げ、この『宣室志』の「以宗」は「次宗」の誤りであるとしている。両『唐書』「張弘靖伝」によれば、張次宗は張弘靖の子。開成年間（八三六～八四〇）に起居舎人に起家し、礼部員外郎、国子博士、史館修撰などを歴任している。『旧唐書』本伝には舒州刺史になったという記載があるが、『新唐書』本伝にはない。ただし『新唐書』巻七十二下「宰相世系表」二下には「次宗、舒州刺史。」とある。また『全唐文』には張次宗の文が八篇収められているが、この話に該当する讃は見られない。○**爲文以讃其事**　ここでは龍が現れたことを、瑞祥もしくは張弘靖の善政の表れとして捉えている。○『**宣室志**』　晩唐・張読（八三四～八六六）が編纂した小説集。既に散佚しており、現在見ることができるのは、明代の輯本（十巻・補遺一巻）のみである。この話は通行本には収められていない。

〔**訳文**〕

唐の浙西観察使李脩は、元和七年（八一二）、絳郡の太守となった。この年、絳郡の属県の龍門に龍が現れ、当時目撃した者は千人程であった。絳郡では事の次第を河中府に報告した。

当時、後の宰相・河東節度使の張弘靖は河中節度使であった。

宰相の子である元舒州刺史の以宗は、かつて文を著してこの事件のことを讃えた。

○41「韋宥」

〔本文〕

唐元和、故都尉韋宥出牧温州、忽忽不樂。江波修永、舟船燠熱。一日晚涼、乃跨馬登岸、依舟而行。忽淺沙亂流、蘆葦青翠。因縱轡飲馬、而蘆枝有拂鞍者。宥因閑援熟視、忽見新絲箏弦、周纏蘆心。宥即收蘆伸弦。其長倍尋。試縱之、應乎復結。宥奇駭、因寘於懷。

行次江館、其家室皆已維舟入亭矣。宥故駙馬也、家有妓。即付箏妓曰、「我於蘆心得之。頗甚新緊。然沙州江徼、是物何自而來。吾甚異之。試施於器、以聽其音。」妓將安之、更無少異。唯短三二寸耳。方饌、妓即置之、隨置復結。食罷視之、則已蜿蜒搖動。妓驚告衆、競來觀之。而雙眸瞭然矣。宥駭曰、「得非龍乎。」命衣冠、焚香致敬、盛諸盂水之内、投之于江。

纔及中流、風浪皆作、蒸雲走雷、咫尺皆晦。俄有白龍百尺、拏攫昇天。衆咸觀之、良久乃滅。（出『集異記』）

〔訓読〕

唐の元和、故の都尉韋宥 出でて温州に牧たりて、忽忽として楽しまず。江波 修永にして、舟船 燠熱たり。一日の晚涼、乃ち馬に跨がりて岸に登り、舟に依りて行く。忽ち浅沙 乱流、蘆葦 青翠あり。因りて轡を縱ちて馬に飲ふに、而るに蘆枝の鞍を払ふ者有り。宥 因りて閑援して熟視すれば、忽ち新絲の箏弦の、蘆心に周纏するを見る。宥 即ち蘆を収めて弦を伸ばす。其の長さ 尋に倍す。試みに之を縱むれば、応じて復た結ぶ。宥 奇として駭き、因りて懐に寘く。

行きて江館に次り、其の家室 皆 已に舟を維ぎて亭に入る。宥 故の駙馬なれば、家に妓有り。即ち箏妓に付して曰く、「我 蘆心に於いて之を得たり。頗る甚だ新緊なり。然れども沙州は江徼なるに、是の物 何くよりして来たるか。吾 甚だ之を異とす。試みに器に施し、以て其の音を聴かん」と。妓 将て之を安んずるに、更に少異無し。唯だ短きこと三二寸なるのみ。方に饌ふれば、妓 即ち之を置くに、置くに随ひて復た結ぶ。食 罷みて之を視れば、則ち已に蜿蜒として揺動す。妓 驚きて衆に告ぐれば、競ひ来りて之を観る。而して双眸 瞭然たり。宥 駭きて曰く、「竜に非ざるを得んや」と。衣冠を命じ、香を焚きて敬を致し、諸を盂水の内に盛り、之を江に投ず。

纔かに中流に及べば、風浪 皆作し、蒸雲走雷あり、咫尺 皆晦し。俄かに白竜の百尺なる有り、拏攫して天に昇る。衆 咸之を観るに、良や久しくして乃ち滅す。

〔語注〕

○都尉 武官の名。戦国時代には将軍の属官で軍尉と称し、漢以降は地方武官となったが、唐代以降は「軽車都尉」「騎都尉」「駙馬都尉」などの勲官の名としてしか置かれていない。**○韋宥** 生卒年未詳。徳宗の娘である唐安公主の夫（但し結婚直前

に唐安公主は亡くなっている）。『新唐書』巻八十三「諸帝公主」に「韓國貞穆公主、昭德皇后所生。幼謹孝、帝愛之。始封唐安。將下嫁祕書少監韋宥、未克而硃泚亂、從至城固薨、加封謚。」（韓国貞穆公主は、昭徳皇后の生む所なり。幼くして謹孝、帝之を愛す。始め唐安に封ず。将に秘書少監韋宥に下嫁せんとして、未だ克くせずして硃泚乱し、従ひて城固に至りて薨じ、封謚を加へらる。）とある。唐安公主の夫である以外の記事としては、『新唐書』巻七十四上「宰相世系表」四上に「宥、宣州刺史。」とあり、『元和姓纂』巻二「韋」に「曾孫宥、台州刺史。」とある他、長孫佐輔「聞韋駙馬使君遷拝台州」（『全唐詩』巻四百六十九）があって、これらが同一人物だとすると『集異記』の記載も含めて宣州、台州、温州の三箇所の刺史を歴任したことになる。これについて岑仲勉『元和姓纂四校記』は「『新表』作「宣州」。『會要』六、韋宥尚德宗女唐安公主。『元龜』四七、婚未成而主卒。似即此人。『集異記』云、「元和中、故都尉韋宥出牧温州。」」と注して列挙するだけだが、郁賢皓『唐刺史考全編』は台州刺史・温州刺史・宣州刺史の項に挙げつつ、台州刺史は「元和中」、温州刺史は「元和中?」とし、宣州刺史は「待考録」に収めている。○**牧**　州郡の長官となること。○**温州**　現在の浙江省温州市一帯。○**修永**　ゆったりしている。○**淺沙亂流、蘆葦青翠**　「浅沙」は砂地の浅瀬のことか。砂がたまって浅瀬になり、また葦もはびこっていて船が進みがたくなっていることを言うか。○**箏**　こと。瑟に似た竹製の弦楽器。○**閑援**　「閑」はひま、用がない意。「援」はひっぱる。○**應乎復結**　すぐにまた縮まってくしゃくしゃの糸の玉になること。『集異記』（中華書局点校本）は「應手復結」に作る。その場合は「手に応じて復た結ぶ」と読む。そちらの方が正しいか。○**江館**　川辺の客舎。○**駙馬**　駙馬都尉のこと。元々は漢代に置かれた、天子の副車を管轄する武官であり、宗室や外戚などが任ぜられることが多かった。魏晋以降は公主の夫に与えられる官職となり、実際の職務は無かった。韋宥は徳宗の娘である唐安公主の夫となっているため駙馬都尉に任ぜられたと思われるが、結婚直前に唐安公主が亡くなっているので、「故」となっているか。○**江徼**　川によって自然に区切られた区域。「徼」はさかいの意。ここでは川に囲まれた砂州のことを言うか。李白「経乱後将避地剡中留贈崔宣城」（『李太白全集』巻十二）に「雙鵝飛洛陽、五馬渡江徼。」（双鵝 洛陽に飛び、五馬 江徼に渡る。）とある。○**咫尺**　非常に短い距離。○『**集異記**』　中唐・薛用弱撰。主に隋唐の間の奇事を記している。元三巻であったようだが、現在伝わるのは二巻本と一巻本のみ。この話は中華書局点校本の補遺に見える。なお六朝小説にも郭季産『集異記』（『古小説鉤沈』所収）があるが、本書と関連は無い。この話は中華書局点校本の巻一に見える。

〔訳文〕

唐の元和年間（八〇六～八二〇）、元の都尉韋宥は地方に出されて温州の刺史となり、鬱々として楽しまなかった。（赴任

の途上、）波は穏やかで、船は蒸し暑かった。ある日の夕方涼しい頃、（彼は）上陸して馬に乗り、舟に併走することにした。突然浅瀬で波が荒くなり、葦が青々と茂っているところがあった。そこで馬から手綱を外して水を飲ませていたところ、葦の枝が馬の鞍をかすめた。宥はそこで何となしに引き寄せてよく見てみたところ、突然まっさらな琴の弦が葦の茎にまとわりついているのに気がついた。宥が蘆を手折って弦を引っ張ると、その長さは一尋（一尋＝約二．四九m）の倍にもなった。試しに手を緩めてみると、それに合わせてまた（縮んで）絡まってしまった。宥は不思議だと驚き、懐に入れておいた。

さらに進んで川辺の宿舎に停泊することにして、家族達はみな舟を係留して宿に入った。宥は元駙馬都尉であったので、家には家妓がいた。そこで琴を弾く妓女に（拾った弦を）渡して、「私は葦の茎のところでこれを手に入れたのだが、非常に新しくて堅く縮んでいる。しかし（これがあったのは）砂州で川に断絶された場所なのに、これはどこから来たのであろうか。私はとても不思議に思う。試しにこれを琴に施して、その音を聞いてみよう。」と言った。妓女がそれを施してみたが、特に普通のものと違いが無かった。ただ普通のものより二、三寸（一寸＝約三．一一cm）短かった。ちょうど食事の用意ができたので、妓女が（琴を）手放して置くと、置いた途端にまた弦は絡まってしまった。食事が終わって弦を見てみると、うねうねと揺れ動いていた。妓女が驚いて他の人々に告げると、みな先を争って見に来た。（弦は）二つの目がはっきり見えていた。宥は驚いて、「竜に違いない。」と言った。そして（家人達に）正装を身につけさせ、御香を焚いて敬意を表し、これを水を張った鉢に入れて、長江に放した。

やっと中流に達したところで、風と波が起こり、雲が立ちこめ雷が閃き、すぐ目の前さえ見えないくらい真っ暗になった。突然、百尺（約三一．一m）の白竜が現れ、（弦の入った鉢を）わしづかみにして天に昇っていった。人々はその様子を見ていたが、しばらくすると消えてしまった。

○42「尺木」

〔本文〕

龍頭上有一物如博山形。名尺木。龍無尺木、不能昇天。（出『酉陽雑俎』）

〔訓読〕

竜の頭上に一物の博山の形の如き有り。尺木と名づく。竜は尺木無くんば、天に昇る能はず。

〔語注〕

○**博山**　博山炉のこと。神仙の住む海中に聳える山の形を刻した香炉。○『**酉陽雑俎**』　晩唐の段成式（？～八六三）が編纂した小説集。前集二十巻、続集十巻より成る。この話は通行本の前集巻十七「広動植・鱗介篇」に見える。

〔訳文〕

竜の頭上には博山炉のような形のものがある。名を尺木という。竜は尺木が無ければ天に昇ることができない。

○43「史氏子」

〔本文〕

有史氏子者。唐元和中、曾與道流遊華山。時暑甚、憩一小溪。忽有一葉大如掌。紅殷可愛、隨流而下。史獨接得、寘於懐中。坐食頃、覺懐中冷重、潛起觀之、其上鱗栗栗而起。史驚懼、棄林中、遂白衆人、「此必龍也。可速去。」

須臾、林中白煙生、彌布一谷。史下山未半、風雨大至。（出『酉陽雑俎』）

〔訓読〕

史氏の子なる者有り。唐の元和中、曾て道流と華山に遊ぶ。時に暑きこと甚だしく、一小渓に憩ふ。忽ち一葉の大なること掌の如き有り。紅殷 愛すべく、流れに随ひて下る。史 独り接し得、懐中に寘く。坐して食頃、懐中の冷重なるを覚え、潜かに起ちて之を観れば、其の上鱗 栗栗として起つ。史 驚懼し、林中に棄て、遂に衆人に白す、「此 必ず竜なり。速やかに去るべし」と。

須臾にして、林中 白煙 生じ、弥いよ一谷に布く。史 山を下ること未だ半ばならずして、風雨 大いに至る。

〔語注〕

○**華山**　五岳の一つ。陝西省華陰市県の西にあり、秦嶺山脈中の高峰。大華山、西岳ともいう。○**栗栗**　多いさま。『毛詩』周頌「良耜」に「穫之挃挃、積之栗栗。」（之を穫ること挃挃、之を積むこと栗栗。）とあり、毛伝に「栗栗、衆多也。」（栗栗は、衆多なり。）とある。なお『漢語大詞典』は「顫抖貌。」（ぶるぶる震える様子。）の例としてこの話を挙げている。○『**酉陽雑俎**』晩唐の段成式（?～八六三）が編纂した小説集。前集二十巻、続集十巻より成る。この話は通行本の前集巻十五「諾皐記」下に見える。

〔訳文〕

史氏の子弟という者がいた。唐の元和年間（八〇六～八二〇）、かつて道士と華山に遊んだ。ちょうどとても暑い頃で、小さな谷川で休んでいた。突然手のひら程の葉が一枚流れてきた。心引かれるような真っ赤さで、流れのままに下ってきた。史だけがそれを手にすることができて、懐の中に入れておいた。しばらく座っていると、懐の中が冷たく重くなってきた気がして、こっそり立ち上がって見てみたところ、（葉に）鱗がびっしり逆立っていた。史は驚いて林の中に放り投げ、そのまま人々に「これはきっと竜に違いない。早く逃げた方がいい。」と言った。

しばらくすると林の中に白煙が沸いてきて、だんだん谷中に広がっていった。史がまだ山を半分も下りない内に、大風や大雨が起こり始めた。

（続）

元原稿製作者・編集担当者

◎○屋敷　信晴　　項　青　　○福本　睦美

西田　則子　　山下　宣彦　　山田　尚子

平山　千加子

（○は編集担当者、◎は編集責任者）